

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02262

研究課題名(和文) 古代ギリシアにおける英雄崇拜と造像に関する研究

研究課題名(英文) Study on Hero-Cults and Statuary Dedications in Ancient Greece

研究代表者

芳賀 京子 (Sengoku-Haga, Kyoko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：80421840

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近年の古代ギリシアの彫像研究は神像を宗教物として考察する一方で、人間の肖像はもっぱらその政治的・社会的側面に注目し、結果として両者を別々の分野に分断してしまっただが死後にこの世に力を及ぼし崇拜の対象となった者を「英雄」と定義しその造像に注目することで、神像や肖像にも共通する彫像の奉獻動機が見えてくる。彼らは将軍や競技祭優勝者といった力ある死者を英雄化し肖像を捧げることで、その崇りを鎮めようとした。過去の大詩人に肖像を捧げることで、現世的な利益を得ようとした。ヘレニズム君主やローマ皇帝に肖像を捧げたのも、見返りを期待してのことだった。彼らは像主の力をコントロールするために像の奉納を行ったのだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は古代ギリシアの神々と人間の間が存在する英雄(力ある死者)の像を考察することで、神像と肖像という別分野と思われがちな像が実はきわめて近い関係にあることを明らかにした。これは近年の古代ギリシアの彫像研究におけるジャンルの細分化を再び統合する役割を果たすものである。加えて、古代ギリシアにおける造像の契機として「死者の崇りを鎮める」「ご利益を得る」という日本人にも馴染みのある考え方があったことを明らかにし、これまでとは異なるギリシア彫刻のイメージを広く一般に提示する。

研究成果の概要(英文)：Recent studies of Greek statuary have produced fruitful results by considering divine cult statues in religious contexts, while human portraits have been analysed in detail from political and social points of view. However, this tendency caused to separate the two genres into two different research fields. Focusing on the third genre, the statue of heroes, the researcher pointed out a specific motivation to dedicate statues, which also holds true for the other two genres. People heroized the powerful dead, such as generals and athletes, and dedicated statues to pacify their revengeful souls. People expected fortune or healing power from heroized ancient great poets. Even the portrait dedication to a hellenistic ruler or a Roman emperor was for the benefit of their own. The statuary dedication was eventually for the purpose of controlling the power of "heroes".

研究分野：美術史

キーワード：ギリシア 彫刻 肖像 英雄 崇拜

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年の古代ギリシア彫刻研究は、美術作品としてではなく、古代文献や碑文などに立脚した歴史的・政治的視点からのアプローチや、宗教物としての的視点からの考察が盛んである。

前者は古代ギリシアにおける肖像文化というテーマと結びつき、歴史学の分野では J. Ma, *Statues and Cities. Honorific Portraits and Civic Identity in the Hellenistic World* (2013) などがある。筆者自身も『ロドス島の古代彫刻』(2006)のなかで、ヘレニズム時代の市民の顕彰像について台座碑文と墓碑浮彫の両面から追求し、この時代の市民や外国人の顕彰像の諸相について考察した。本研究開始直後には、美術史/考古学の分野から C. M. Keesling, *Early Greek Portraiture. Monuments and Histories* (2017) といった論考が出ている。

一方、宗教物としての像が有する力に関しては、C. A. Faraone, *Talismans and Trojan Horses: Guardian Statues in Ancient Greek Myth and Ritual* (1992) や D. T. Steiner, *Images in Mind. Statues in Archaic and Classical Greek Literature and Thought* (2001) が文学に主軸を置いて考察しており、筆者も平成 23~25 年度の挑戦的萌芽研究「古代ギリシアの礼拝像の研究

『古き像』と『新しき像』の神性」において美術史的見地から、崇拜の対象とされた古代ギリシアの神像を、信仰が生きていた古代ギリシア人の視点から捉え直すことを試みた。

しかしギリシア彫刻を宗教的・社会的コンテクストから探ろうという試みは、結果として彫像を機能面から「神の像」と「人間の像」に二分し、別個のものとして研究するという潮流を生んでいることに気づかされた。

### 2. 研究の目的

近年のギリシア彫像研究は、像の機能や意味に注目するあまり、「神の像」(礼拝像)と「人間の像」(肖像)の問題は別個のものとして扱われる傾向にある。しかし形の上では、両者の境は曖昧だ。アルカイック時代のクーロスやコレーは、それが神を表しているのか、卓越性といったような抽象的な概念を示しているのか、具体的な奉納者や死者の代替なのか、結局のところははっきりしない。クラシック時代には肖像に個性が加えられるようになり、人間の像というジャンルが確立したように思われているが、それでも生前に肖像がほとんどといってよいほど作られなかったことは考えに入れておかななくてはならない。そして本当の意味で肖像が発達し始めるクラシック後期からヘレニズム時代には、ギリシア周辺国やヘレニズム諸国の君主像の「英雄化」や「神格化」が始まり、「人間の像」は「神の像」を目指していったと考えられている。つまり「人間の像」と「神の像」は、ほとんど常に、互いに切っても切れない関係にあったはずなのだ。

そこで本研究は、両者の間に介在する「英雄(ヘロス)」という存在に注目し、これまでジャンルとして考察されてこなかった「英雄の像」の実体を古代文献と造形作品から探り、その「英雄像」を仲立ちとして、二分化してしまった「神の像」と「人間の像」を再び結びつけることを目的とする。

### 3. 研究の方法

「英雄(ヘロス)」の定義はさまざまだ。『イリアス』では戦士、『オデュッセイア』では戦士以外の王も含んでいる。ヘシオドスは現在の人間(第5の種族)より昔の、トロイア戦争に従軍した戦士たち(第4の種族)を英雄、半神と呼ぶ。そのなかには、アキレウス、アガ멤ノン、メネラオスとヘレネのように、その墓とされる場所での英雄崇拜が確認される者もいる。その一方で、ほぼ同時代の人間であるにもかかわらず、死後にも強力な力を有するとみなされ、英雄としての祭祀を捧げられた者もいた。そこで本研究では、死後に崇拜対象となった人間を広く「英雄」として捉え、英雄崇拜と造像の関係を考察する。

こうした「英雄」は(1)神話の英雄、(2)共同体のために死ぬことで英雄化された同時代の人間、(3)神や英雄の世界のことを詠う詩人、(4)支配者の英雄化、の4つに大別できる。

(1)神話の英雄は、神々の血を引いた半神ではあるが死すべき存在である。古代ギリシア人は、彼らのことを遠い過去にはあるが現実に実在した存在とみなしており、各地に英雄の墓と伝えられるものも存在していた。ただし造形作品において、ナラティブな神話表現のなかで表されている英雄の例はいくつも知られているが、崇拜対象としての姿ははっきりしない。そこで英雄祭祀の場であるヘロオン(英雄廟)の遺構からの出土品、古代文献の中のヘロオンや英雄像の記述、奉納浮彫に表現された英雄の姿などを参照することで、祀られていた英雄の姿を探る。

(2)共同体によって英雄化され、英雄に対する祭祀が捧げられた同時代の人間はおそらく各地に多数存在したのだろうが、像の建立が確認できるケースは少ない。そのため、文献中に言及されている有名な戦士・将軍や、それと似た境遇で死後に像を捧げられた人物を中心に扱うこととなる。さらに、極めて早い時期からつくられ始めた人間の像として知られる競技優勝者像も、英雄化としての観点から捉え直すことができないうかが検討する。

(3)偉大な詩人のような卓越した才能を与えられた人間は、ほかの人々よりも神々や英雄の世界に近いとみなされたと思われる。彼らの像の建立や祭祀が行われた事例を検討する。

(4)支配者の英雄化は、クラシック後期からヘレニズム時代に認められる現象として、最も研究が進んでいるジャンルである。だがその研究は、ともすると単なる肖像研究となり、英雄化や崇拜の面の考察が忘れ去られがちである。そこで前4世紀のギリシア周辺国の君主像や、アレクサ

ンドロス大王にはじまるヘレニズム王の英雄化について、ギリシアの伝統的な英雄崇拜という側面から検討する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 叙事詩・神話の英雄の崇拜と彫像

英雄 = 祖先の崇拜は、すでにミュケナイ時代にも存在していた。トロス墓という巨大墳墓も、レフカンディの「トゥンバ」の権力者の墓も、死者を英雄化したヘロオン（英雄廟）と呼ぶことができる。ではミュケナイ時代に英雄化された王の像は存在したのか。その問題を考えるため、先史考古学の第一人者である Dr. Massimo Cultraro (CNR、イタリア国立研究所) を日本に招聘し、2018年3月22日に東北大学において講演会 “The Power of Images: Royal Ideology and Sacred Kingship in Mycenaean Greece” を開催し議論した。その結果、ミュケナイの英雄 = 先祖崇拜においては、黄金の仮面をつけられ、豪華な屍衣をまとって埋葬された王 = 戦士の遺体そのものや武具などが崇拜対象となり、地上にはその死者の偉業に関連する石碑が建てられはしても、肖像のようなものが立てられることはおそらくなかったという結論に至った。また歴史時代に入ってからミュケナイの墓における英雄崇拜に関しては、ミュケナイの円形墓域Aで英雄ペルセウスの名を刻んだ奉納品が見つかり、歴史時代にここがミュケナイ創建の英雄ペルセウスの墓だとみなされていたらしいという指摘があった。

その他のミュケナイ時代の墓でも、「暗黒時代」後の前8世紀頃になってからの奉納品が見つかることがある。なかには銘文によって、歴史時代のギリシア人がそうした墓や遺構を、叙事詩や神話の英雄と結びつけていたことが確認できるケースもある (C. M. Antonaccio, *An Archaeology of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, 1994)。オリュピアの「ペロピオン」やアテネの「エレクテイオン」のように、時代が下ってから新たにヘロオンが整備された例もあり、さらには前6世紀にスパルタがオレステスの遺骨を (Hdt 1.67-68)、前475年にアテナイのキモンがテセウスの遺骨を「発見」して持ち帰り、墓や聖域が建設され、新しい英雄崇拜が創始されるということも起きている (Paus. 1.17.4; 1.30.4; 3.3.7)。

こうした崇拜のなかで英雄像がどのような役割を果たしたのか、墓やヘロオンに崇拜対象としての英雄像が置かれていたのかは、定かではない。オリュピアのペロピオンには何体かの人間の像 *andriantes* が奉納されていたというが (Paus. 5.13.1) それがいつのものか、誰の像かはわからない。そうしたなか、英雄メネラオスと女英雄ヘレネが祀られていたスパルタの通称「メネライオン」に関しては、興味深いエピソードが伝えられている。前6世紀に女の子を連れてここに詣っていた乳母が、女の子を像 *agalma* の前に立たせて祈ったところ、この子はのちにスパルタに並ぶもののない美人になったという (Hdt. 6.61.2-5)。この *agalma* はヘレネの像と考えるのが妥当で、しかもそれは崇拜対象として機能し、霊験あらたかな像と信じられていたわけだ。前6世紀にこの「メネライオン」に奉納されたブロンズ製の女性小像や、前1世紀のディオスクロイへの奉納浮彫の中央に表されている正面向きのクソアノンのような女性像 (図1: スパルタ考古学博物館 inv. 201) にその残滓を見ることができるかもしれない。ただし「メネライオン」に関しては、ヘロドトスやパウサニアスは神殿 *naos* という語を用いており、イソクラテスは彼らに神としての (つまり祭壇での) 犠牲式が行われていたことに言及しているため (Hdt. 6.61; Paus. 3.19.9; Isoc. *Hel.* 63)、一般的なヘロオンとは区別して考えるべきかもしれない。ヘロオンにおいてはむしろ英雄の遺骨が、それ以外の場所でも英雄の武具などの遺品が、崇拜対象として重要な役割を果たしていたようだ (A. Coppola, *L'eroe ritrovato. Il mito del corpo nella Grecia classica*, 2008)。



図1

##### (2) 共同体による同時代人の英雄化

###### 戦士・将軍

前514年にアテネの僭主の弟ヒッパルコスを暗殺したハルモディオスとアリストゲイトンは、おそらく処刑され、葬儀も行われなかつただろう。しかしアテネが民主政に移行すると、すぐに彼らの彫像がアゴラに建立された。彼らに対しては、英雄に対する祭祀 *enagisma* も捧げられた (Arist. *Ath. Pol.* 58.1)。ここには確かに、彼らを僭主と戦った戦士として祭り上げようという政治的目論見があっただろうが、それ以外に、埋葬もされない無残な死を遂げた彼らを宥めるといった目的もあったのではないか。

それというのも、前6世紀から5世紀には、埋葬されない戦士 (特に将軍) が引き起こす穢れや祟りを像によって浄め宥めるといったエピソードが散見するからだ。プラタイアの戦い (前479年) でペルシア軍を破ったスパルタの将軍パウサニアスは、罪人として追い詰められてアテナ・カルキオイコス神殿に立て籠り、引きずり出されて死亡した。その後、スパルタを飢饉が襲った。そこで人々は穢れを払い祟りを収めるため、神域前に彼の墓を造営し、彼の身体の代替としてブロンズ像を2体奉納したという (Thuc. 1.134-135)。

テルモピュライの戦い（前 480 年）で戦死したスパルタ王レオニダス 1 世の遺体は、埋葬されることなく戦場に晒された（Hdt. 7.238）。そのためスパルタ人は、影像（eidolon）を用いて国葬を執り行ったようだ（Hdt. 6.58.3）。またアンフィポリスの戦い（前 422 年）で戦死したスパルタの将軍ブラシダスは、経緯は不明だがアンフィポリスの城壁内に葬られ、前 4 世紀にはその墓がヘロオンとなり、都市創建の英雄として祀られた（Thuc. 5.11.7）。

スパルタのアクロポリスにはパウサニ阿斯に加え、レオニダスとブラシダスの「空の墓」があり、毎年彼らに対して演説と競技祭が行われたという（Paus. 3.14.1）。祖国を遠く離れて戦死した人物に対し英雄化や造像が行われるのも、やはり遺体を祖国に葬ることができなかった死者への償いという考え方に由来するのだろう。アクロポリスでは、兜を被った戦士の等身大大理石像が 2 体出土している。1 体（図 2：スパルタ考古学博物館 inv. 3365）は前 480～470 年頃、もう 1 体（同、inv. 4270）は保存状態の悪い頭部のみの断片であるため制作年代ははっきりしない。レオニダスの eidolon は葬列で持ち運べるような軽い素材だったろうし、パウサニ阿斯像はブロンズ製だったわけだが、この 2 体の大理石像がレオニダスやブラシダスの墓に建てられた彼らの像という可能性は残されている。



図 2

サラミスの海戦（前 480 年）でアテネを勝利に導いたテミストクレスは、後に陶片追放され、最期は小アジアのマグネシアで自殺に追い込まれた。彼はマグネシアの領主だったから、墓は町のアゴラに造営された（Thuc. 1.138.5; Diod. 11.58.1; Plut. Them. 32.3）。立地からみて、これはヘロオンとみなしてよいだろう。のちにはアテネ市外にも彼の墓（空の墓、あるいはヘロオン？）が営まれた（Paus. 1.1.2）。彼の肖像は、前 5 世紀半ばにオリジナルがつけられたと考えられるローマ時代のコピーが残されている（オスティア考古学博物館）。なおアテネにおけるペルシア戦争の「英雄」としては、マラトンの戦い（前 490 年）の将軍ミルティアデスも、アテネの獄中で死亡し、子のキモンが権力を握ってからデルフォイに肖像が建てられている（Dem. 23.196; Paus. 10.10.1）。

民主政期のアテネでは、集団としての戦死者に対しては国葬が執り行われ、国営の集合墓が造営されたが、個々の戦死者に対しては碑文に戦死者が刻まれはしても英雄化や造像が行われることはなかった（N. T. Arrington, *Ashes, Images, and Memories: The Presence of the War Dead in Fifth-Century Athens*, 2015）。ただし個人レベルで人型の墓標が建てられたり墓碑に浮彫が刻まれたりすることは（少なくとも前 430 年以降のアテネでは）盛んに行われた。

こうした一連の事例からは、本来ならば共同体によって顕彰されてしかるべき傑出した人物の死に際し十全な葬儀が執り行われなかった場合、時には後になってから、墓やヘロオンが造営され、肖像が建立されたことが窺われる。造像は単なる顕彰ではなく、不十分な葬儀に対する償いという役割を持っており、死者の英雄化のプロセスの一部だったように思われる。

### 競技祭優勝者

人間の像の最初の例として、プリニウスは競技祭優勝者の像を挙げる（HN34.16）。オリュンピアでは実際、前 7 世紀後半にさかのぼる優勝者像らしきブロンズ小像が見つかっている（オリュンピア考古学博物館 B 4300）。プリニウスはさらに、三度優勝した者には等身大像がつけられたと述べるが、それがいつにさかのぼるのかは記していない。パウサニ阿斯（6.18.7）がオリュンピア神域内で最も古い優勝者像として言及している木彫像は、前 6 世紀後半のものだ。だが同世紀末から前 5 世紀には、名の知られた彫刻家がつくったブロンズ像がいくつも挙がるようになる。何百年も前の自国の優勝者像を有名彫刻家につくらせ、奉納した例も認められる（eg. Paus. 6.3.8; 6.13.4）。過去の優勝者を新たに国の英雄として祭り上げたものとみえる。

優勝者像は競技祭開催の神域の他に、祖国の神域やアゴラなどにも建立された。パウサニ阿斯（8.40.1）はアルカディア地方フィガレイアのアゴラで、総合格闘技の優勝者アラキオンの像を目にしている。同地で出土したクーロスのような大理石像（図 3：オリュンピア考古学博物館 257）は、右脇に残る腕の跡がパウサニ阿斯の記述するポーズと一致しないためアラキオン像ではないかもしれないが、前 6 世紀半ばに等身大の彼の像が母国に建立されたのは事実と考えてよいだろう。

等身大像の最も早い証拠は、南イタリアのシバリで出土した前 6 世紀前半のブロンズ板だ。ここにはオリュンピア競技祭優勝者のクレオンプロトスが、自分と同じ大きさで同じ厚さの像を女神アテナに奉納した旨が記されている（CEG 394 = SEG 29, no. 1017）。南イタリアの出身者は、オリュンピア競技祭の優勝者のリストに名を連ねている。ギリシア世界の周縁部でも、あるいは周縁部だからこそ、ギリシア本土の競技祭での優勝者は、母国で英雄にも等しい扱いを受けたのかもしれない。ターラントのとりわけ豪華な墓には、副葬品として酒器や競技者の持物のほかに、パナテナイア競技祭アンフォラが納められており、競技祭優勝者に対し手厚い葬儀がなされたことを感じさせる（ターラント国立マグナ・グラエキア博物館）。



図 3

前 5 世紀には少なくとも 6 名の競技祭優勝者が、ギリシア各地で英雄崇拜の対象になった(B. Currie, *Pindar and the Cult of Heroes*, 2005, pp. 120-121)。とりわけ有名なのはタソスのテアゲネスで、死後、彼の像が追放刑に処されて海に投げ込まれると町を凶作に陥らせた。そのため彼の像は元の場所(おそらくアゴラ)に戻され、そこで英雄どころか神と同じ供犠を受けることになったという(Paus. 6.11.4-9; 6.6.5)。テアゲネスは治癒の力を持つ英雄として、タソスだけでなく別の都市でも崇拝された。またロクリのエウテュクレスについても、彼の像を破壊したために飢饉が起こり、町の人々が新たに彼の像をゼウス像にも等しく祀りなおしたことが伝えられている(Callim. *Aetia* 3 fr. 84-85 [Diegesis 2.5])。

強さを誇る戦士や将軍と同じく、美しい身体と卓越した能力を有する競技祭優勝者もまた、死後の不名誉など、何らかの契機によってこの世に影響を及ぼす強力な死者(=英雄)となる潜在性を有しているとみなされていた。だから町に災厄が降りかかると、人々はそれが死者である競技祭優勝者の祟りと考え、像を建立し祭祀を捧げることで、死者を宥めようとしたのだろう。

なお、前 4 世紀に制作された Apoxyomenos と呼ばれる競技祭優勝者については、エフェソスとクロアチアでローマ時代のブロンズ製コピーが見つかっている。フィレンツェのウフィツィ美術館の大理石製コピーも加え、3 体の 3D データを取得・分析し、ローマ時代における競技祭優勝者の受容についても考察した。

### (3) 偉大な詩人

戦場や競技祭における能力のほかに、卓越した知性や感性も英雄化の要因になりえた。前 5 世紀半ばには、詩人を「力のある死者」とみなしていたらしい事例がいくつか認められる。

レギオン人ミキュオンは息子の快癒祈願が成就したことを感謝して、オリュンピア神域に 15 体以上もの彫像を奉納したが、そのなかにはアフロディテやペルセフォネといった冥界に関わりのある女神や、アスクレピオスやヒュギエイアなどの治癒神像に混じって、詩人ホメロスとヘシオドスの像もあった(Paus. 5.26.2-5)。おそらく人間から英雄・神になったアスクレピオスやテオゲネスが治癒神として祀られたのと同じように、偉大な詩人にも治癒の力があるとみなされたのだろう。

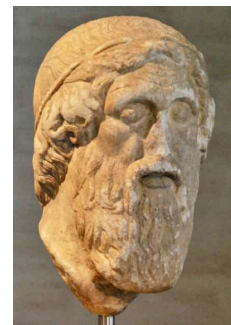


図 4

ミュンヘンにある両眼を閉じた老人の頭部(図 4: ミュンヘン、グリプトテーク G1 273)は、オリジナルの制作年代が前 450 年頃と推定されるため、ミキュオン奉納のホメロス像のコピーではないかと考えられている。一方、メタポンティオンのアゴラにアポロン像と並んで祭壇のそばに立つ詩人アリストアスの像は、その建立によって人々に幸運がもたらされるという神託に従って建てられたという(Hdt 4.14-15)。どうやら過去の大詩人の像は、現実的なご利益と結びついていたようだ。

前 5 世紀半ば過ぎには、ピンダロスやアナクレオンといったほぼ同時代の詩人たちの像も建立された。ピンダロス像についてはローマ時代のコピーが多数残るが、オリジナルが置かれていた場所についての記録はない。テバイの競馬場にあったという彼の墓 mnema (Paus. 9.23.2) あるいはアレクサンドロス大王すら破壊しなかったという彼の生家 (Arr. *An.* 1.9.10) に置かれていたのではないかと推定されている。墓が公共の場に建てられたり生家が 100 年も保存されたりしたところを見ると、彼もやはり崇拜対象だった可能性が高い。これに対して叙情詩人アナクレオンの像は、アテネのアクロポリスにあった(Paus. 1.25.1)。建立の経緯は不明だが、テバイのピンダロス崇拜への対抗心も手伝って、アテネにゆかりのあるこの詩人の像が奉納されたのかもしれない。

詩人の英雄化については、パロスの詩人アルキロコスが前 4 世紀に英雄として崇拝されていたことを示す碑文が見つかっている(D. Clay, *Archilochos Heros. The Cult of Poets in the Greek Polis*, 2004)。神々や英雄の世界を詠う詩人は、神々と人間の間を取り持ち、現世的なご利益をもたらす者として、英雄崇拜の対象になったのだろう。

### (4) 支配者の英雄化・神格化

支配者の像の建立は既に前 6 世紀の東ギリシアに認められ、ディデュマでは像の前で儀礼が執り行われたことも確認される。しかし本格的に英雄化が行われたのは前 4 世紀半ばのギリシア周辺の諸王国であり、支配者の墓はヘロオンとして造営された。アレクサンドロス大王の死後は、大王の崇拜がヘレニズム諸王(特にプトレマイオス朝エジプト)の崇拜と結びついた。共和政末期のローマ人は、こうした造像と英雄化・神格化のプロセスを取り入れようとしていたが、それを完成させ、地中海全域で押し進めたのはローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスだった。これらの像の建立者は、君主や皇帝からの庇護や厚遇を期待していたことが指摘されている。

こうして見ると、本来、英雄崇拜に英雄像は不可欠というわけではなかったようだが、悪しき力を振るう死者を宥めるため、また大詩人から現世的な利益を得るため、そして君主や皇帝からも実際の利益を期待して、これら英雄化された人間たちの像は建立された。像は像主を喜ばせるものであると同時に、建立者に像主をコントロールする力を与えるものでもあったと言えるだろう。

なお、以上の成果を取り入れて、2021 年に単著の出版を予定している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 芳賀京子	4. 巻 37
2. 論文標題 古代ギリシア彫刻の地域流派	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美術フォーラム21	6. 最初と最後の頁 108-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 K. Sengoku-Haga, S. Buseki, M. Lu, S. Ono, T. Oishi, T. Masuda, K. Ikeuchi	4. 巻 -
2. 論文標題 Polykleitos and His Followers at Work: How the Doryphoros Was Used	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Artistry in Bronze: The Greeks and Their Legacy (XIXth International Congress on Ancient Bronzes)	6. 最初と最後の頁 87-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 芳賀京子	4. 巻 -
2. 論文標題 神像を見る・神像が見守る 古代アテナイの場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 空間史学叢書3 まなざしの論理	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kyoko Sengoku=haga	4. 巻 -
2. 論文標題 Diffusion of Roman Imperial Portraits	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World (Proceedings of the Fourth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World, 2018)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kyoko Sengoku-Haga	4. 巻 8
2. 論文標題 Rinvenimenti scultorei dalla 'Villa di Augusto'	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Amenitas	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Kyoko Sengoku-Haga
2. 発表標題 Diffusion of Imperial Portrait in the Roman Empire
3. 学会等名 4th Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World: Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 芳賀京子
2. 発表標題 イメージという知の伝達 ローマ皇帝の肖像の複製と拡散
3. 学会等名 日本西洋史学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kyoko Sengoku-Haga
2. 発表標題 Before Aphrodisias: Sculptors in Asia Minor in the Late Hellenistic Period
3. 学会等名 Aphrodisias Workshop: War and Peace in Roman Aphrodisias, 50 BC - AD 250
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 芳賀京子
2. 発表標題 古代ギリシア神域の記述と信仰の記憶
3. 学会等名 東大人文・熊野フォーラム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 芳賀京子、芳賀満	4. 発行年 2017年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 660
3. 書名 西洋美術の歴史 1 古代	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----